

## 歴史点描 29 網干郡代 石川一格船荷物漂流 その2

丸亀藩壱万石の飛び地を領主に代わって治める郡代は、馬廻格以上で100石～300石の知行を有したと『網干町史』は書くが、<sup>しか</sup>確としたことは丸亀でも分からないという。そんな上級武士の暮らしぶりが垣間見える「書物之事一通・二」を読んでみよう。回収品一覧

長持壺棹但葛籠 長持壺棹但同断 長持壺棹但同断 長持壺棹但白木さん付 長持壺棹但絹夜着三ツ 絹布団式ツ 木綿夜着式ツ 風呂敷式ツ 屏風一包 式枚屏風大一包 屏風大一双 椽敷紙包壺 衣桁ノ足一くくり 屏風下地壺 せいろう四但一くくり 茶俵壺 椀黒箱壺 植木一くくり 跡付一箱 椀箱一ツ 椀箱一ツ 膳箱一ツ但長箱入 立口壺 黒膳拾人前入壺 張籠入壺 張籠入壺 鞍懸箱壺 張籠入壺 宗和黑膳拾五人前入壺 丸行灯一張 時計かせ壺 めん台大式ツ一くくり 畳表壺張 菰包樽壺 蠅不入棚壺 雛壇板七枚一くくり 傘壺包 畳拾式枚外半畳壺枚 重箱壺箱入 刀箱壺 手たわら壺束 面壺 〆三拾九品

これを見ると長持ほか浮きやすい木製品が目立つが、百余品積入れたとの記事から60品ほどが波にさらわれたか、海底に沈んだままなのだろう。

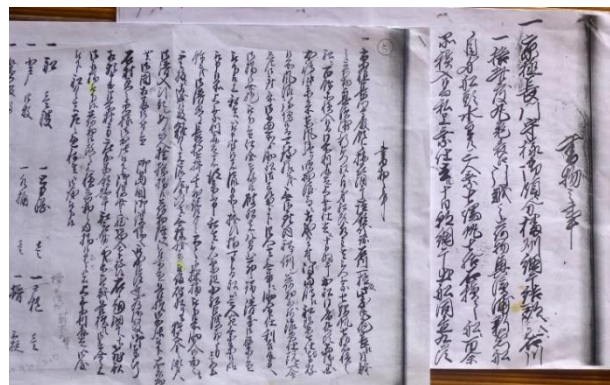
絹の夜着で寒さを凌ぎ、茶俵壺から茶人「一格」の号を偲ばせる。宗和黑膳拾五人前入(壺)から推測すると、本膳で客人をもてなし、<sup>ひと</sup>三味線の趣味も可成りの腕前らしく粋な暮らしぶりを偲ばせ、<sup>まなむすめ</sup>雛壇板七枚一くくりからは愛娘の姿も浮かび上がる。

文化3年(1806)着任以来、文政3年(1820)浅香荘左衛門氏との交代まで、長きにわたり郡代をつとめていた彼は、天保13年(1842)郡代として再着任する。『萬覚日記』(水田静枝家文書)では、11月24日丸亀藩領の伊津浦に着岸(現たつの市御津町岩見)26日お茶屋へお入り、若旦那・奥方・御子様・御子達、荷物船は4艘を数え、一家総出の着任ぶりが記録される。安政3年(1856)村瀬弥右衛門と交代するまで龍野城下に住まっていたが、年令についての消息は不明だ。

### 網干歴史講座 垣内 田中早春



御津町岩見港



市史編集室所蔵 書き物之事二通